

「英語教育改善プラン」に基づいた英語指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～新潟県～

課題とその分析

- ・言語活動を主体にした授業を実践するための研修の必要性。
- ・全教員が研修を受講できる体制づくりの必要性。

具体的な取組内容

- 英語教育推進リーダーによる研修
 - ・小学校外国語活動実践講座(全県)
 - ・英語教育中核者研修(2回)(上・中・下越地区)
 - ・外国語教育担当教員研修集会(2回)(上・中・下越)
 - ・高等学校英語指導力向上研修(4回)
(上越・魚沼・県央・新潟①・新潟②地区)
- 研修協力校における大学教授による研修
 - ・公開授業及び協議「発信力を高める授業づくり」
 - ・公開授業及び協議「生徒の興味・関心を高める単元の導入」
 - ・講演及び協議「スピーキングの力を育成するための授業づくりと評価」
 - ・「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業づくり

成果の波及・周知

- ・研修会の実施は地域内の複数の学校で実施する。
- ・研修会において、報告・協議を行う。

課題解決のための手立て

- ・CAN-DOリスト形式の目標設定→指導→評価の定着を図る。
- ・言語活動を主体とした学習と生徒の英語力の相関の好事例を作り、周知する。

成果と課題

- ・県内全域での研修実施
- ・授業における、生徒の英語による言語活動時間の占める割合(使用率50%以上)は上昇した。(%)

	H25	H27	H29
中学校	46.0	68.7	72.2
高校	33.2	39.9	45.4

- ・求められる英語力を有する生徒の割合は上昇した。(%)

	H25	H27	H29
中学校	26.8	28.9	30.9
高校	27.7	35.2	38.9

- ・新学習指導要領に向けて、CAN-DOリスト形式の目標設定による達成状況の把握に課題がある。

H29 中学校34.0% 高校40.4%

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～十日町市立十日町小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- (1)教科化以前の英語科指導に対する抵抗感のある教師が多い。⇒教師の授業観再構築と授業力向上をねらった研修を実施する。
- (2)児童にとって外国人とコミュニケーションをとる必要感が希薄である。⇒児童が主体的に外国人とコミュニケーションする場を設定する。

具体の取組の内容

- (1)小学校、中学校、高等学校が輪番で毎月実施する授業参観・協議会に学年主任が参加し、英語科に対する授業観を再構築し、中学校・高等学校の基礎となる小学校英語科の授業改善の方向性を探る。
- (2)「大地の芸術祭」と関連させた指導計画を立案・実践し、児童の英語によるコミュニケーションへの意欲を向上させる。

- ・コミュニケーション力を向上させる英語科授業の工夫と実践
- ・6年生児童が書いたPR文を高等学校3年生が英訳し大地の芸術祭PRパンフレットを作成
- ・6年生児童がデザインしたキャラクターの缶バッジを作成

→大地の芸術祭でパンフレットと缶バッジを配布しながら、英語を活用して外国人観光客と交流した。



成果

- (1)教師の授業観が変容し、外国語活動や英語科の授業づくりへの意欲が向上した。
〈中学校・高等学校の授業参観後の教師の感想〉
 - ・英語を話す必然性が生じるように、指導計画が練られていた。
 - ・間違いを恐れず主体的に表現する生徒に驚いた。
 - ・中学校・高等学校での生徒の学ぶ姿を想定することがで、小学校での授業づくりに意欲がもてるようになった。
- (2)6年生児童が外国人と交流する楽しさを実感し、英語でコミュニケーションをとることへの興味・関心・意欲が高まった。

〈大地の芸術祭PR活動の様子から〉

- ・パンフレットとバッジが、よいコミュニケーションツールとなった。
- ・授業で学習を積み重ねてきたクラスルームイングリッシュを活用することができた。



今後の課題・方向性

- ・今年度の教師の英語科授業への興味・関心の向上を基盤にして、授業改善を推進し、教科化に備える。
- ・生活科や総合的な学習の時間と関連付けて英語科の指導計画を立て、実際に英語を活用して表現する場面を積極的に設定する。
- ・小・中・高の教師が参加する授業参観・協議会を今後も継続し、児童・生徒の実態に即した指導ができるようにする。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～十日町市立十日町中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

現状:話し手、聴き手の双方の努力によって、温かいコミュニケーションを成立させようとする意識が低い。
手立て:話し手と聴き手の良いモデル、悪いモデルを提示しながら生徒に気づきを与える。

具体の取組の内容

「Good Speaker + Good Listener = Good Communicator」をテーマに、話し手と聴き手の良いモデルと悪いモデルを提示し、生徒に比較させた。

良い話し手と聴き手に必要な要素を生徒に考えさせながら、CAN-DOの最終ゴールである「地元のキラリ人」を紹介するスピーチでは、その要素を取り入れて発表する姿が見られた。

授業公開では、聴き手がスピーチした友人に対して、良い点や感想を英語で伝えながらアドバイスをし、話し手はフィードバックを参考に修正しながら、スピーチ本番に向けて自信を付ける生徒が多かった。帯活動での相手を褒めたり、リアクションしたりするための表現をインプットする活動も効果的であった。



成果①

①意識調査(肯定的回答)

内容	H30.5	H30.11
英語の授業が好きですか?	70.2%	81.6%
英語をもっと学びたいですか?	69.5%	79.6%

②外部検定試験の合格率

(CEFR A1 レベル)

H29 受験者数40名 合格者24名
合格率60%

H30 受験者数27名 合格者24名
合格率89%

※対象生徒:3年生

成果②

- スピーチが話し手の一方的な発話ではなく、聴き手を意識し、聴き手と共にスピーチを作り上げていく意識を持たせたことで、スピーチの中にもやりとりが生まれ、話し手と聴き手が互いを思いやりながら活動しようという意識が見られた。
- 帯活動の中で、話し手に対してのコメントやアドバイス、称賛する英語を練習したことで、スピーチに対しても自然に英語でコメントできる生徒が増えた。
- 英語の授業の中で学んだ「相手のことを考えて」コミュニケーションを取ろうという姿勢が、日常生活の場面でも見られるようになった。

今後の課題・方向性

- 話し手として、自分の思いを聴き手を意識して伝えようと、意欲的になった生徒が多い一方で、表現の正確さに欠けている生徒がいる。より質の高い表現で発話させるためにも、語彙力の不足を補う必要がある。「言いたかったけど言えなかったこと」に焦点を当てながら、仲間との会話や辞書を活用して振り返る時間を確保し、「言えなかったことが、言えるようになった!」という達成感を味わい、英語で話すことへの楽しさや自信を高めていく必要がある。
- 聴き手への意識が芽生えた一方で、英検等の外部試験の結果を見るとリスニングに弱さが見られる。ALTの活用はもちろん、教師の英語が生徒にとって1番のモデルとなるため、教師自身の英語力の向上が必要不可欠である。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟県立加茂農林高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・他者と協調して取り組む態度の育成を目指し、ペアワーク、グループワークを伴う授業、パフォーマンステストを実施
- ・目的意識を持って取り組む態度の育成を目指し、ポートフォリオ(My Learning Mate)を振り返りの指導に活用

具体の取組の内容

【平成29年度】

- ・平成30年度の授業で活用することを前提に、CAN-DO Listの見直しを英語科全体で行い、各科目の指導目標を整理・共有した。
- ・科目リーダー制を敷き、各科目のリーダーを中心に各科目の指導目標・指導プランを作成した。
- ・明星大学清田洋一教授から指導・助言をいただきながら、1年生向けのポートフォリオの冊子「My Learning Mate」を作成した。

【平成30年度】

- ・科目リーダー中心に作成される指導目標に沿うプランを担当者で共有して指導・評価を行っている。授業案検討の際、生徒の関心を高める工夫や、ペアワーク、グループワークが機能するために必要なこと、協調性を高めるパフォーマンステストの実施方法等について活発な意見交換を行い、指導と評価の改善を目指して科全体で取り組んでいる。
- ・英語科全員が担当しているコミュニケーション英語Ⅰの授業でMy Learning mateを指導に活用し、単元毎の振り返りや、年間の目標に対する振り返りを定期的に行うよう指導し、PDCAサイクルの中で目的意識を持って学習に取り組む態度の育成を目指している。
- ・10月に研究授業を行い、明星大学清田洋一教授から指導・助言をいただき、その内容を英語科で共有して指導の改善に取り組んでいる。

成果①

My Learning Mateやパフォーマンステスト後の生徒の振り返りから、以下の成長が見られた。

- ①協働が求められる場面で他者をサポートし、自らの学びを高めようとする生徒が現れた。
- ②振り返りから得られる気づきや学びを、その後の学習でどのように改善するかを考えて学習する生徒が増加した。

成果②

- ・昨年度よりペアワーク、グループワークに意欲的に取り組む生徒が増え、授業に活気が出るようになった。
- ・指導目標に向かう授業、協働を伴う授業やパフォーマンステストを科全体で行う体制が整ってきた。
- ・CAN-DO Listの活用と科目リーダー制の導入により、授業案検討や実践後の振り返りの際の指標が明確になり、教師もPDCAサイクルの中で実践力を高めることができています。

今後の課題・方向性

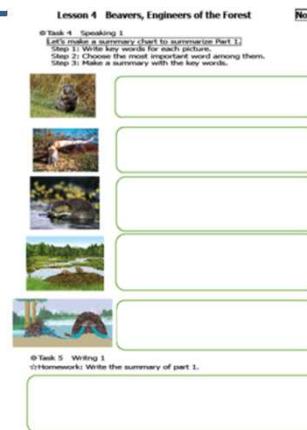
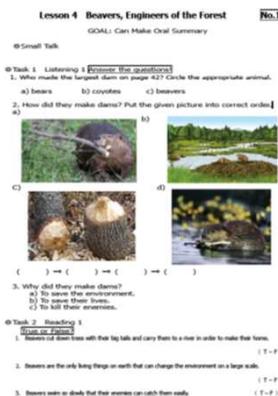
- ・学習内容の理解に苦しむ生徒への対応
英語の語順や意味と音のつながりを効果的に理解させる指導法を科全体で研究し、授業力向上を目指す。
- ・協働学習になじめない生徒への対応
他者との協働を重視した授業展開やパフォーマンステストの工夫を継続することで、協働学習になじめない生徒に対して必要な支援を行うことができる生徒を育てていく。これにより、教師の働きかけだけでなく、生徒同士でも必要な支援を行うことができる自立した学習集団の形成を目指す。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語で自分の考えを表現する能力、英語でディベートしていく能力の向上
- ・主体的・対話的で深い学びにつながる課題解決型授業の推進

具体の取組の内容

- ・パフォーマンステストの企画・実施
 - …ALTと協働、企画して評価
- ・英語を使う活動を増やす取組
 - …ペアー・グループを作り、教科書の内容を英語で口頭要約、内容についての意見を英語で発表し合う活動
- ・英語を通して考える言語活動・英語を英語のまま理解できるようにする授業改善
 - …朝日大学の亀谷みゆき先生を招いて、本校の教員とTT授業を公開授業として実施、継続的な授業改善につなげる(ワークシートを右に掲載)



成果①

- ◎学力を身につけるために、熱心に授業を行っていると思う生徒の割合は高ポイントで推移
 - 平成27年調査 全校 92.7%
 - 平成28年調査 全校 93.4%
 - 平成29年調査 全校 93.0%
- ◎G-TECのスコアが上昇
 - トータルスコア
 - H28卒業生 1年次406.7 → 2年次447.2
 - 全国 // 409 → // 445
 - H29卒業生 1年次408.9 → 2年次455.9
 - 全国 // 409 → // 445
 - H303年生 1年次390.0 → 2年次440.5
 - 全国 // 414 → // 446

成果②

- ◎英語の授業に積極的に取り組む生徒が増加
 - ・スピーチ発表で英語を使うことに積極的になった
 - ・ペアトークの実施によりコミュニケーション能力が向上
- ◎パフォーマンステストの実施
 - ・積極的に英語を活用する態度が身についた
 - ・英語で伝えるための手順が身につき、発話能力が身についた

今後の課題・方向性

- 英語で自分の考えをより深い所まで表現する力の向上
- 発話・作文で使用する表現の正確性 (accuracy) の向上
- パフォーマンステストの回数を増やし、内容の充実
- 英語科全体での授業改善への情報共有

平成28～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟県立十日町高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・発達段階に応じた言語活動の設定と指導の工夫
- ・意味のあるコミュニケーション場面を設定する授業への改善

手立て

- ・小中高連携による指導
- ・本物の場面を提供する授業

具体的取組の内容

・ハブスクール事業(平成29～30年度県指定)

小・中学校との連携による授業互見、協議会の定期開催及び市主催行事への合同参加

・自己理解・郷土理解を深めながら、発信力育成を支援する授業作り

ペア・グループワークの活用、郷土理解を深める故郷自慢プレゼンテーション、意味のある「やりとり」の場面設定

・真正性の高い場でのコミュニケーションを目指した授業作り

大地の芸術祭、異文化交流会、英語ボランティアガイド発表会、留学生との交流

成果①

①意識調査

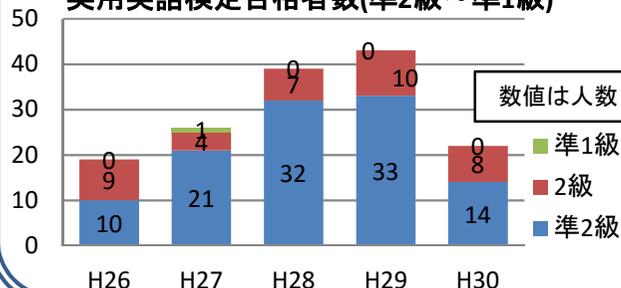
「英語の授業が好き」



* 学校全体の傾向として、取り組みの効果があつたと言える。

②外部試験を活用した英語力

実用英語検定合格者数(準2級～準1級)



* H30年度は第2回まで。クラス数はH29より1クラス減少。

成果②

①多様で本物の言語活動を体験をすることで、対面的なコミュニケーション活動に対する苦手意識が薄れてきた。

②グループワーク等を通して、互いを認め合い、協同して最後までやり抜く粘り強さが醸成された。

今後の課題・方向性

①流暢さと正確さが両立する、あるいは目的に応じて重点を変える言語活動の指導と評価

②パフォーマンステストにおける評価規準の精査

③教員と生徒による学習到達目標の共有

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～新潟県立新潟中央高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ①言語活動と評価の一体化⇒パフォーマンステストの実施と評価
- ②授業改善のための校内研修の充実⇒公開授業と校内研修の実施

具体の取組の内容

- ①1学年で学期に1回、普通科共通のパフォーマンステストを実施した。教科書のリテリング活動を中心に行い、評価に組み入れた。2年生でも食物科・音楽科で共通のパフォーマンステストを実施した。また、1年生でGTECのスピーキングテストを取り入れた。
- ②1学期と2学期に各1回、校内の公開授業月間に合わせて公開授業を実施し互いの授業を参観し、授業の改善を目指した。また、事業の一環として校内研修を実施し、新潟大学 松沢伸二 教授からスピーキング力を伸ばす授業作りと評価について指導してもらった。

成果①

英検受検人数増加
2017第1回 ⇒ 2018第1回
165名 196名
2017第2回 ⇒ 2018第2回
115名 201名
1学年を中心に受検人数が増加。新潟県スピーチコンテストに1・2年生4名が参加し、1年生1名が新潟県第5位入賞。

成果②

外部試験
(進研スタディサポート)に見られる生徒の変容
2年4月 普通科 228名
A3以上 6名
B3以上 136名
↓
2年9月
A3以上 14名
B3以上 138名
A3以上の上位層の増加が見られた。

今後の課題・方向性

- ①3年間を見通したスピーキング力育成を目的とした指導計画作成と実施。
- ②リスニングの力を伸ばす指導と評価の充実。
- ③スピーキングの力を支える語彙・文法などを含む基礎学力の定着。

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟県立新潟南高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・生徒の4技能の育成を促す教科全体の指導体制の確立
- ・大学入試にも対応できる実践的な英語コミュニケーション能力の育成

具体の取組の内容

○教員の指導力の強化

- ・授業参観等による校内研修の実施
- ・校内研修の積極的参加とそこで学んだ指導法の共有
- ・教科会議における授業改善の取組事例と学年方針の共有
- ・CAN-DOリストの見直しと改訂

○生徒の英語力の強化

- ・基礎基本事項の徹底
- ・ディベートを用いた批判的思考力の育成
- ・GTECを学年単位で導入し、年計に組み込み、教科を超えて学年で対応
- ・協働学習の導入

成果①

外部試験(GTEC)の偏差値にみえる生徒の変容 *比較のためスピーキングテストの結果は含んでいない

1年生		H30. 9月
Average		463.1
2年生	H29. 12月	H30. 6月
Average	480.9	515.9
3年生	H29. 12月	H30. 7月
Average	535.4	542.0

成果②

○授業時に見える生徒の変容

- ・ディベート、少人数を対象としたプレゼンテーションを通じて、賛成・反対の意見を表明しながら、聞き手にきちんと自らの考えを展開しようとする姿勢が育っている。
- ・パフォーマンステストの実施や外部検定(GTECと英語検定)の受験により4技能のバランスを考慮した学習への取組が見られる。
- ・テスト合格のための短期記憶学習から、スキル上達のための反復トレーニングへの意識の変化。

今後の課題・方向性

- ①グループ活動によるコミュニケーション活動の充実・高度化
- ②パフォーマンステストの継続的な実施
- ③外部試験結果の経年比較や生徒アンケートによる、生徒の変容の分析
- ④授業改善のための校内研修の充実